
リトルバスターズサイドストーリー未来から来た子供達

治田 神裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズサイドストーリー 未来から来た子供達

【Nコード】

N1316Q

【作者名】

治田 神裕

【あらすじ】

唐突に現れた少年、少女達。未来から来た彼らは何の為に来たのか。そして明かされるリトルバスターズの未来。

各ヒロインによる理樹争奪戦。バトルスタート！戦う筋肉、響き渡るツツコミ。理樹のツツコミが世界を変え、少年少女達が未来を開く。

ねえ、おかしくない！？どこからツツコンだらいいのさ！？ by

Mr・モテ理樹

一応、恋愛になると思います。彼らにも色々目的がありますから。

最後に時間軸が飛んだりします。

ブログ（前書き）

適当に読み流していただければ。不快な方はお戻り下さい。

ブログ

この話しは友人とターミネーターを見ていて出たネタを形にした物です。

クラナドといった作品も考えたのですが、リトルバスターズでいくことになりました。

更新は受験が終わるまで超不定期です。

いろいろツツコミどころがあるでしょうが、流すか、戻るを押していただけるとありがたいです。

話しは基本、理樹と誰かの子供になります。

いわゆるパラレルワールドというやつで、鈴と結ばれた未来もあれば、小毬と結ばれた未来も、他にも、クド、唯湖、美魚、葉留佳、さらには沙耶や、佳奈多、佐々美と結ばれた未来だってあるでしょう。

そんな未来から子供がやって来るお話です。

ちなみに最後は本編の修学旅行での事故を未来から来た彼らもしくは彼女達が止めて終わりにする予定です。

子供の名前はメンバーの名前を使い、男子は恭介、真人、謙吾

女子は、小毬、クド、葉留佳

といった感じでつけます

いろいろ設定に無理がありますが、二次創作、パラレルワールドだと割り切ってお読み下さい。

第1話 未来から来た少年（前書き）

とりあえず、投稿です。

第1話　未来から来た少年

それはある日の日曜だった。

「ふーっ、全員かなり上手くなったな」

恭介が呟く

グラウンドではリトルバスターズのメンバーが野球の練習に汗を流していた。

「ふう、喉が渴いたね」

「おう、理樹。それなら買いに行くか？」

「そうだね。恭介、ちょっと飲み物買ってきて来るから」

「おう、わかった。俺の分も頼む」

「わかったよ、皆も何かいる？」

「私たちはいないよ」

「そう？　じゃあ、真人。行こうか」

そう言って理樹と真人が去った後、事件は起きた

「きりがいいし、理樹と真人が戻ってくるまで休憩にするか」

という恭介の提案で皆が木陰で休んでいると……

「あれ？ あの子どこから入ったのかな？」

小毬が男の子を見つけた

「どこにいる？」

「ほら、あそこに」

小毬が指差した方を見ると、四歳くらいの男の子がグラウンドに立っていた

「迷子かな？」

「わふゝ、心配なのです」

「ふむ、それなら私が見てこよう」

小毬とクドの声を聞いて来ヶ谷が立ち上がった。

「あ、姐御。私も！私も！」

葉留佳も立ち上がり、二人は男の子に向かって歩いて行った。

「それにしても、迷子とは珍しいな」

「全くな、この辺りに幼稚園とかあったか？」

「……心配ですね」

「うん。親が見つかるといいんだけど」

「来ヶ谷が理性を保てるか……」

「ふええ！？ 心配してるのはそっちなの？」

小毬が驚いて尋ねるが、

「ふむ、とりあえず連れてきたぞ」

ちょうどそこに来ヶ谷が男の子を連れて戻って来た。

「よく、我慢したな」

「うむ、まあ何度か理性が飛びかけたが」

恭介が来ヶ谷を労うと、改まって男の子に尋ねた

「名前は？」

「……き……け」

「ん？何だつて？」

「……きょうすけ」

「「きょうすけ！？」」

皆の驚きの声が重なった。しかし驚きはまだ続いた。

「きょうすけか……ところで名字はなんて言うんだ？」

「……………なおえ」

「「「なおえ!?!?!」」」

再び全員の声が重なる。

「おい、おい、今度は理樹と同じ名字かよ」

「むう……………凄い偶然もあつたもんだな」

「しかし、確かに言われて見れば似ているな」

「確かに髪の色は恭介さんと一緒ですネ」

「……………顔は直枝さん似ですしね」

全員がワイワイと騒ぐ。

「そうか、ところでお父さんかお母さんはここにいないのか？」

恭介がそう尋ねると男の子（リトル恭介）はキョロキョロと周りを見ていたが、やがて鈴の側に走り寄るところだった。

「…お母さん」

「「「なにい!?!」」」

騒然とするメンバー

「な、ななな」

言われた鈴は顔を赤くして口をパクパクしていたが

「り、鈴。お前まさか……」

「違うわぼけえ!」

「がはっ!」

馬鹿な事を言った恭介をとりあえず蹴っていた。

「大体、あたしは子供を産んだ覚えはない」

恭介を蹴って落ち着いたのか、鈴がそう言った。

「だが現に……」

「まあいい、この子に聞いてみよう」

いつの間にか復活した恭介が謙吾を遮って男の子（リトル恭介）に話しかける。

「なあ、本当に鈴がお母さんなのか？」

「…（コクリ）」

「そうか……ならお父さんは誰何だ？」

そう恭介が尋ねると男の子はキまたヨロキヨロと辺りを見渡していたが

「…お父さん」

そう言つて、ジュースを買つて戻つて来ていた理樹を指差した。

「「「はあああ！？」」「」」

こうして、理樹達を揺るがす事件は始まった。

「つまり、この男の子の名前はなおえ、きょうすけで。僕と鈴が親だつて言ってるの？」

「まあ、そういう訳だ」

「り、鈴。お前……」

「このぼけっ！」

「がはあっ！」

隣では真人が蹴られていた。

ちなみに男の子は理樹の後ろに隠れていた。

「うーん。そう言われても僕にもさっぱりだよ」

「そうか……」

「とか言つて。本当は知ってるんじゃないですか？」

「いやいや、本当に知らないから」

「ふむ、どうやら嘘じゃないようだな」

「いやいやいや、嘘も何もいつそうなったつて言つたさ」

「まあ、とにかくこの少年の身元を確認するべきだろう」

「…そうですね」

来ヶ谷と美魚にそう言われて理樹は（ここからはリトル恭介に統一）
に向き直った。

「よし、じゃあ何か住所とかが分かるような物を持ってない？」

理樹がそう尋ねるとリトル恭介は携帯を取り出した。

「え？ 見ていいの？」

「…うん」

「ありがとう。じゃあ見るね」

そう言って理樹が携帯を開くと待受画面が目飛び込んできた。

（。A）・・・

（っA）ゴシゴシ

（。；A）・・・

（っA）ゴシゴシゴシ

とりあえず目を擦ってよく見たが現実が変わらなかった。

「どうした理樹？」

そっさいながら横から覗きこんだ恭介も絶句。なぜならそこには……

「何故、理樹と鈴の写真が！？」

理樹と鈴の間で笑うリトル恭介が写っていたからだ。

「え！？」

「まじか!？」

他の皆も覗いて同じ反応を示した。

「理樹、こんな写真を撮った覚えはないぞ」

「だよ、僕もないよ」

「ふむ、だがよく見ればこれに写っている少年と鈴君は大人びていないかい？」

「確かに、ちょっと老けた感じがするな」

「え、そう?」

言われて理樹も再び見ると確かに年をとっていた

「十年くらいした理樹がこうじゃないか?」

「そうだな、確かにそれくらいだな」

「ふむ、他にはないか見てみよう」

そう言って携帯を操作する来ヶ谷。

すると……

「……恭介氏、これを見てくれ」

「何だ来ヶ谷？」

そう言って何とは無しに携帯を覗き込んだ恭介は態度を一変させた。

「な、何？ どうしたのさ？」

理樹がそう尋ねると恭介と来ヶ谷は黙って理樹に携帯を差し出した。

「??」

疑問符を浮かべながら受け取った理樹だったが、携帯に表示されたカレンダーを見るなり表情を変えた。

「恭介……これって」

「……ああ」

「何だ、何だ？何があったってんだ？」

「馬鹿兄貴、あたしにも分かるように話せ」

「わふー！一体どうしたんですか？」

皆が一斉に尋ねると、恭介は携帯を差し出しながら静かにこう言った。

「どうやらその子は未来から来たらしい」

ちなみに見間違いでなければ、携帯には今から十年後の日付が書いてあった。

「「「な!？」」」

絶句する一同。

「こいつは事件だぜ」

第1話 未来から来た少年

完

第二話 未来人対策会議とお義兄さん（前書き）

久しぶりの投稿です。

第二話 未来人対策会議とお義兄さん

あの後、当然のことながら野球は中止となり、現在リトルバスターズのメンバーは理樹と真人の部屋に集まっていた。

「ではこれより、未来人対策会議を行う」

恭介の宣言で会議が始まる。

ちなみにリトル恭介は理樹のベットでお昼寝をしている。

「ふむ、まずはどうやってあの少年がこちらに来たのかを知るべきだろうな……」

「確かにそうだ。しかし、もっと重要な点があるだろう?」

「重要な点?」

理樹が尋ねると恭介は力強く頷いた。

「ああ、つまり鈴と理樹が結婚したからこそこの子はここにいるんだろ?つまり俺は理樹のお義兄さんとなる訳だ」

「それがどうしたってんだよ?」

「まあ、急かすな真人。つまり俺がいたいのはこれから理樹は俺の事をお兄様、もしくはお兄さんと呼ぶ必要があるわけーがはっ!」

限りなくくだらないことだったのでとりあえず鈴が蹴りを入れてい

た。

「そんなんでもいいだろ、ぼけーっ！」

「どうでもいいとは何だ！　そもそも鈴が俺をお兄ちゃんと呼んでくれないからー」

「このぼけっ！」

「がはっ！」

恭介は鈴にぼこぼこにされていた。

「つていうか、そこまで呼んで欲しいもんなのか？」

「……名前を呼びながら見つめ合う二人……これはあります」

「いや、しかし少年に呼ばれるならおねーさんも嬉しいよ」

「そついう話じゃなかった筈だけど……」

理樹のツツコミが入り軌道修正される。

「とりあえずは、来ヶ谷の言う通り、どうしてあの子が過去に来たのか原因を探るべきだな」

「だが、あの子はよくわかっていなかったぞ？」

「ああ、だがあの子一人の意思でこちらに来たとは考えにくい、いずれ未来から何らかのアクションがあるはずだ」

「つまり、状況の変化を待つ……と？」

「そういうことだ。残念ながらその子の携帯にも詳しい情報はなかったからな、当面は様子を見るしかないだろう」

「けど、それじゃあこの子はどうするの？」

理樹が尋ねる。

「お前と鈴の子供だろう？　なら、二人が面倒を見るのが妥当じゃないか？」

「いやいやいや、そんな事言われてもまだ知らないし、僕と鈴はまだ付き合ってもいないのにいきなり子供を預けられても……」

「なら、鈴と今から付き合えばいい。鈴、構わないな？」

「…（コクリ）」

恭介が尋ねると鈴は頷いた。

「理樹なら構わない」

「いやいやいや……」

「何だ、理樹はあたしの事が嫌いなのか？」

「え？　いやそりゃ好きだけど……」

「あたしも理樹が好きだ。なら問題ないな」

さらっと言つ鈴。

思わず理樹は赤くなつた

「うむ、熱いな二人とも」

「流石は鈴。理樹、これからは俺のことはお義兄さんと呼べ」

「まだ言ってるぜ」

「ま、とにかく問題ないだろう」

来ヶ谷や恭介達はあっさりと認めていたが、小毬達は微妙な顔をしていた

「それで？今からどうするんだ？」

辺りはもう暗くなっていた。

「ふむ、とりあえず飯にするか。理樹と鈴はその子を見ておいてくれ」

「え？ ……まあいいけど、早く戻って来てよ」

「何だ少年。そこは鈴君と二人きりなのだから、『じゅっくり』
とでも言っべきだろう」

「いやいや、そしたら夕飯が食べれないじゃない！」

「鈴君を……いやなんでもない」

「理樹どうした？」

「何でもないよ！」

からかわれているとは分かっている、思わず顔を赤くした理樹が
叫ぶ。

「はっはっはっ、じゃあ仲良くな」

来ヶ谷の笑い声を残して、残りのメンバーは部屋を出ていった。

「やれやれ、大変な事になったなあ……」

皆が出て行った後、理樹の呟きだけが部屋に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1316q/>

リトルバスターズサイドストーリー未来から来た子供達

2011年5月23日15時23分発行